ISSN　0910-2396

野鳥だより

－北海道－

北海道野鳥だより第199号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　2020年３月21日

キレンジャク

2020. 1 .22　札幌市東区伏古公園
撮影者　栗　林　宏　三（札幌市東区）

もくじ

渡島管内七飯町でみられるツバメのねぐら入り
七飯町　田中　正彦
NPO法人バードリサーチ研究員　三上かつら …… 2
私の探鳥地　函館：津軽海峡のハシボソミズナギドリ
札幌市中央区　鈴木　幸弥 …… 4
北海道とシベリアセンニュウ
―札幌市でシベリアセンニュウの記録―
札幌市中央区　川路　則友 …… 6
厚岸湖・別寒辺牛川水系のオオハクチョウ
厚岸水鳥観察館　澁谷　辰生 …… 8
ノドグロツグミ（亜種ノドアカツグミ）の観察記録
北海道大学農学部生物資源科学科３年　千葉　利久 …… 10
前田森林公園（札幌市手稲区）でチョウセンメジロ
石狩市　本多　純 …… 11
表紙の鳥　キレンジャク　札幌市東区　栗林　宏三 …… 11
創設50周年記念事業の取り組みと今後への期待
北海道野鳥愛護会50周年記念事業実行委員長　富川　徹 …… 12
50周年記念探鳥会のお知らせ …… 12
探鳥会ほうこく …… 13
宿泊探鳥会（旭岳）のお知らせ …… 14
茨戸川緑地探鳥会のお知らせ …… 15
鳥民だより …… 15
探鳥会あんない …… 16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ（https://aigokai.org）で閲覧することができます。

渡島管内七飯町でみられるツバメのねぐら入り

七飯町　田中　正彦
NPO法人バードリサーチ研究員　三上　かつら

ツバメは、北海道では南側を中心とした一部地域でのみ繁殖しています。このことは、全国鳥類繁殖分布調査から得られた繁殖期のツバメの分布図からも知ることができます（図１）。そのため、あまりなじみのない方も多いかもしれません。北海道ではスタンダードでも本州ではそうではない、またその逆のこともたくさんありますが、ツバメにもそれは当てはまるかもしれません。

図１．全国鳥類繁殖分布調査（1990年代および2010年代のいずれか）でツバメが記録された地点を●で示す。

本州など日本の多くの場所では、ツバメは家の玄関や軒先などに巣をつくることが多く、昔は「ツバメが巣をつくる家は栄える」などと歓迎されたものでした。長野県や岩手県では家の中にツバメが巣をつくっていることがあります。涼しい気候だからでしょうか。近年は、家の構造の変化や衛生観念の変化のため、民家や商店でツバメは営巣できなくなってしまうことも多く、道の駅などで頑張って子育てするツバメが目立つようになりました。一方、北海道のツバメは、牛舎や農業用倉庫などでちょっとしたコロニーをつくって営巣することが多いようです。農地が多いお土地柄ゆえかもしれません。

図２．七飯町位置図

繁殖が終わると、

ツバメはアシ原などに集まってねぐらをとるようになります。道南の七飯町（図２）藤城にある休耕田では、毎年大規模なねぐらがみられます。藤城でねぐらが見られ始めるのは６月頃からです。繁殖に参加していないであろう鳥たちが、イタドリの群落に集まってねぐらをとります。７～８月になると、休耕田のアシが成長し、私たちの背より高くなるころには、ツバメのねぐらもそちらに移ります。その頃にはねぐら入りするツバメの数もぐっと増えて、８月下旬に個体数がピークとなります。最も多かった時で、およそ２万羽のねぐら入りがみられました。

写真１．ねぐら入りの様子

ねぐら入りの様子はとてもドラマチックです。まず、太陽が高いうちはツバメはアシ原にはほとんどいません。あちこちに散らばっていたり移動したりしているのでしょう。夕方－８月であれば17時をまわったころから、数羽程度の小さな群れがパラパラと周辺の農地や川の上を飛びはじめます。静かにアシ原の近くで待ち続けましょう。すると、スズメの群れが先にやってきます。スズメは16時くらいからアシ原にやってきて、17時を過ぎるとすでに大きな群れになって寝る前のおしゃべりに興じます。時折カワラヒワも同じアシ原にねぐらをとるため加わってきます。ノビタキやウズラの声も聞こえてきます。夕方ぎりぎりまで狩りに励むモズもよく見かけます。アオサギやダイサギは編隊を組んで上空を飛翔し、山を越えた先にあるねぐらへ向かいます。ハヤブサやノスリが鉄塔からひらりと舞い降りてくることもあります。そうこうしていると、スズメはいつのまにか無口になっていて、ツバメは数百、数千羽に増えて群舞しています（写真１）。「土食って虫食って」などと鳴きながらアシ原の周りをぐるぐると飛び回る様は壮観です。たまにツバメとは違う「ジュジュッ」という鳴き声が聞こえてきます。ショウドウツバメです。そして舞っていた群れは突然アシ原に吸い込まれるように降りて、ねぐら入りとなります。スズメと同様、しばらくは寝る前のおしゃべりが聞こえてきますが、暗闇が深まるにつれ、やがて静かになります。

写真２．捕獲されたツバメ

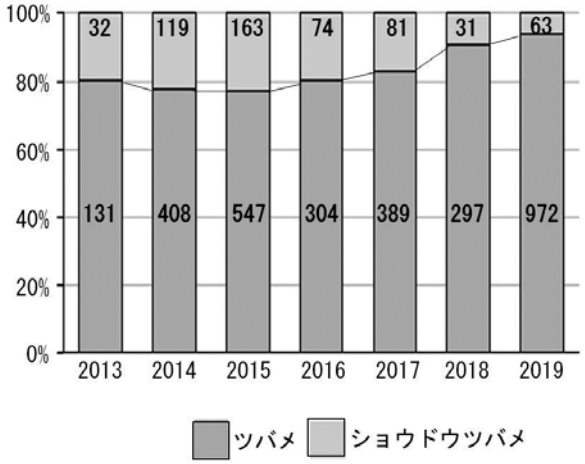

図３．ツバメ捕獲数の推移；棒グラフの数値は田中、三上、および吉田純氏の合計羽数

このねぐらでは2013年から継続して標識調査が実施されています（写真２）。１シーズン中に捕獲できたツバメは131～972羽。これに対し、ショウドウツバメは31～163羽でした。努力量は毎年異なりますが、両種は別々の場所ではなく同じ網にかかります。2013～2017年はツバメ100羽に対しショウドウツバメが20～30羽くらいでしたが、2018年と2019年はそれぞれ約10羽、約6羽にとどまっています（図３）。

これらのツバメのなかには、七飯町藤城から遠く離れた場所で再捕獲された例があります。繁殖期では、藤城で捕獲された翌年以降にロシアの沿海地方（プリモルスク）、道北の天塩町、日高の新ひだか町で再捕獲されています。越冬期にはフィリピンとインドネシアで再捕獲されています（田中・三上 2017）。長旅です。これからもっと行き先がわかってくると面白いですね。

参考文献

田中正彦・三上かつら 2017. 標識データからみた北海道亀田郡七飯町の休耕田を通過する鳥類. 日本鳥類標識協会誌 29(1):1-15.

私の探鳥地

函館：津軽海峡のハシボソミズナギドリ

札幌市中央区　鈴　木　幸　弥

会社員時代、ご縁があって通算２度、11年に渡って函館に住んでおりました。１度目の時はまだ鳥見を始めていなかったのですが、２度目の赴任時は当地の日本野鳥の会道南桧山に入れていただき、道南各地で鳥見を楽しんできました。

道南といえば各種の探鳥地ガイドにも紹介されている函館山や大沼公園での探鳥を思い浮かべる方が多いと思いますが、道南の魅力はそれだけに尽きるものではありません。北海道に分布する鳥で陸域を通過して渡る鳥たちの多くは道南を通過します。春と秋の渡りのシーズンはこれらの鳥にとって道南は重要な渡りの回廊のひとつとなっているのです。したがって道南の基本的な鳥相は道央圏とさほど変わるものではありませんが、中には道央圏ではなかなかお目にかかれないホトトギス、国内で越冬するほとんどが函館周辺の海に集中するコクガン、また北海道では珍しいツバメのねぐら入り、秋の渡りのため函館山に集結するルリビタキなど魅力的な鳥見がほかにも多々あります。

今回はそのような道南の鳥見の魅力のひとつであり、今も私が毎年通っている津軽海峡のハシボソミズナギドリの渡りをご紹介したいと思います。

ハシボソミズナギドリ

では、ハシボソミズナギドリとはどんな鳥でしょうか。普段、皆さん陸の鳥を中心にご覧になっているので、海鳥はなかなかなじみが薄いかもしれません。ハシボソミズナギドリ（学名：*Puffinus tenuirostris*）は、ミズナギドリ目-ミズナギドリ科に分類される鳥で、全長40～45㎝、翼開長95～100cm。ウミネコと全長はほぼ一緒、翼開長はやや短い中型のミズナギドリです（写真１）。雌雄同色で全身ほぼ黒褐色、体下面はやや灰色がかり、翼裏面は灰色や灰白色に見えます。同科のハイイロミズナギドリとは外見がそっくりで、ハシボソミズナギドリのほうが一回り小型なのですが、海上で見ると両種を識別するのはなれないとなかなか大変です。食性はオキアミが主で、浮魚、イカなどを食べます。またミズナギドリ科としてはかなり深く、数十ｍの潜水が可能だといいます。

写真１．2017. 5. 7　八戸～苫小牧航路　北山政人さん撮影

オーストラリア南方のタスマニア付近の島々で繁殖し、繁殖がおわると一路北のベーリング海、中にはさらに北極海にまで超長距離の渡りをする鳥として知られています。南極近くから北極海まで、その渡りの年間移動総距離は約32,000kmにのぼると言われ、キョクアジサシと並んで鳥類最長の渡り鳥のひとつなのです。最近の研究では、ハシボソミズナギドリはタスマニアを飛び立つとまったく休まず２週間飛び続け、太平洋を一気に北上し、北日本の親潮流域にまで達します。

ハシボソミズナギドリの親鳥は南極周辺の南極海で大発生するナンキョクオキアミを捕らえて子育てします。ところが親鳥は雛が育っていようがいまいが、自分たちの渡りの時期（南半球の秋）が来ると雛をおいてさっさと渡りをはじめてしまいます。残された雛は巣穴の中でそれまでに蓄えた栄養で成長・換羽し、すでに去った親鳥を追って自分たちの渡りを始めます。しかし、地球上で最大規模の生物資源量を誇るオキアミといえども年によってその量は増減します。運悪く不漁の年にあたった雛は親鳥が渡去するまでに渡りに必要な脂肪を十分蓄えられずに自分たちの渡りを始めなければなりません。その結果、途中で脂肪を使い切り、あるいは赤道付近の貿易風（東風）に流されて、本来の通過地点よりずっと南、西日本の海岸などに大量に漂着するストランディングという現象が起こってしまいます。数年に一度、西日本などでミズナギドリが大量死して、その死骸が砂浜に打ち上げられたというニュースが流れることがありますが、そのほとんどはそのような幼鳥の死骸です。そのような試練を乗り越えた鳥だけが北太平洋の寒流域で大発生するオキアミ（ツノナシオキアミ）にありつけるのです。ハシボソミズナギドリはツノナシオキアミの大発生を追って、三陸沖、苫小牧沖、オホーツク海、ベーリング海へと渡りを続けて行きます。

ハシボソミズナギドリの観察

このように外洋性の海鳥であるハシボソミズナギドリは普段、陸からはほとんど観察できません。観察するためには船に乗って外洋にでるしかありません。ところが、海上を渡るハシボソミズナギドリの群れを陸から観察できる場所があるのです。それが津軽海峡に面した函館です。

タスマニアを出発するハシボソミズナギドリは総数1,000万～1,500万羽と言われますが、その内のごく一部は

下北半島の尻屋崎から西に折れ、津軽海峡を抜けて日本海に向かいます。ごく一部とは言っても100万羽ほどが日本海に抜けるのです。海峡を抜けるハシボソミズナギドリは細い一筋の帯となって途切れることなく続いていきます。

津軽海峡は東西約130kmありますが、その最狭部、函館の汐首岬～大間間は約17kmしかありません。風況によってハシボソミズナギドリの帯は青森側によったり、函館側

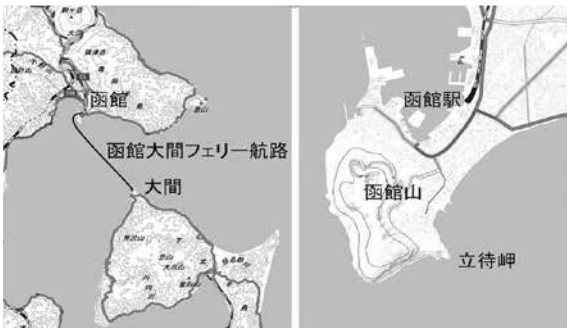

図１．立待岬（右）と函館大間フェリー航路（左）

によったりはしますが、運が良ければ函館の津軽海峡に面したところではどこでも、このハシボソミズナギドリの帯を観察可能です。中でも私のおすすめする観察場所は函館山の観光名所のひとつ、立待岬（図１右）です。観光地だけあって駐車場も整備されており、駐車場から20mほどの岬の突端で柵にもたれて双眼鏡を海に向ければハシボソミズナギドリの途切れることのない帯が目に飛び込んできます。

もちろん陸から離れた海上を低く飛ぶ鳥を観察するのですから、鳥の１羽１羽はケシ粒ほどでしかありません。それでも遠くタスマニアから１万km近く飛び続けて、今ここを通過し、さらに数千kmかなたの北極を目指しているのだと思うとその感動はひとしおです。まさに地球のダイナミズムに触れる思いがします。

残念ながら、地元でもこのように陸からハシボソミズナギドリの渡りが見られるということはあまり知られていないようで、私以外の観察者にはついぞ出会ったことがありません。

ハシボソミズナギドリの渡りはまず３月下旬に非繁殖の亜成鳥がタスマニアを出発し、続いて繁殖成鳥が４月上旬、最後に親に置いてきぼりをくった幼鳥が４月中旬から下旬に出発するそうです。約２週間飛び続けて日本近海に到着するそうですので、函館での観察適期はほぼ４月中旬から５月一杯になります。もしこのころ函館にお出かけでしたら、観光ついでに立待岬で双眼鏡を海に向けてみてはいかがでしょうか。

フェリーからの観察

もっと間近にハシボソミズナギドリの渡りを観察したいという方には函館～大間のフェリーに乗船されることをお勧めします（図１左）。フェリーというとちょっとしり込みされる方もいらっしゃるかもしれませんが、このフェリーは片道約１時間半、朝の便で函館を出れば午後には函館に戻って来られるというお手軽な航海です。最新の船は揺れも少なく、快適な鳥見が楽しめます。

残念ながら数年前に新造船に代替わりしたため若干大型化し、海面からの距離がやや離れてしまいました。それでも苫小牧～大洗や苫小牧～八戸の１万トン級の大型フェリーに比べればはるかに小さく、海面がより間近に感じられます。この海面が間近だという事は海鳥観察には非常に重要で、大型船からの観察はどうしても鳥を見下ろす形になります。ミズナギドリは海面近くをほとんど羽ばたかずに滑空し、時に風を受けて上空に舞い上がり、その位置エネルギーをスピードに変えるというダイナミックソアリングで飛び続けますので、観察できる甲板がなるべく低い船で観察するほど、その飛行のダイナミックさが肌で感じられます（写真２）。

さらにこのフェリーの特筆すべき点は渡っていくハシボソミズナギドリの帯を横から突っ切る観察ができることです。これは他の大洗や八戸航路のフェリーでは絶対経験できないことです。ハシボソミズナギドリの帯は船が近づくとハイイロミズナギドリなどとは全く異なる独特の回避行動をとるのですが、それは実際に見てのお楽しみといたしましょう。

以上、函館から見るハシボソミズナギドリの面白さをご紹介してきましたが、写真で見るようにハシボソミズナギドリはきれいな色をしているわけでもなく、それ自体はごく地味な鳥です。しかし、その背後には命がけで地球縦断を繰り返すというドラマチックな生活が隠されています。皆さんに少しでも海鳥に興味を持っていただければ幸いです。

写真２．ハシボソミズナギドリ　2017. 4.23　函館～大間航路のフェリー上から　北山政人さん撮影

北海道とシベリアセンニュウ
―札幌市でシベリアセンニュウの記録―

札幌市中央区　川　路　則　友

私の手元に14年前の記録写真が送られてきました（写真１）。2006年12月１日に札幌市南区真駒内公園で撮られた鳥の写真です。撮影者は吉野一郎さんと言われる方です。まず顔や体型、尾羽の形状等を見ると、典型的なセンニュウ類の特徴を示しています。何枚かの写真で上面を見ると、上背部にはっきりとした縦斑が見られていません。そのことからマキノセンニュウ、オオセッカおよびヤチセンニュウなどとは異なることがわかります。また中央を除く尾羽先端にバフ色の縁が見られますが、上背部の羽毛に明瞭な淡色縁があることから、シマセンニュウ、ウチヤマセンニュウとも異なります。さらには、腰がやや赤褐色を帯び、上尾筒に明瞭な黒い斑紋がまじっているように見えます。それ以外に三列風切羽の羽縁にあるバフ色が明瞭であること、尾羽に細い横線が何本も見えることなど、これら特徴を併せ持つことを考え合わせると、この個体はシベリアセンニュウ*Locustella certhiola*と思われます。

写真１．シベリアセンニュウ（性不明、第１回冬羽）上面
吉野一郎氏撮影

シベリアセンニュウは、シベリア北部からモンゴル、中国北部で繁殖し、冬は東南アジアまで渡って越冬するとされています（Kennerly & Pearson 2010）。これまでのシベリアセンニュウの日本での記録は非常に少ないのですが、いくつか興味深い点があり、また私にとって少々因縁深いこともあることから、やや細かいことも含めて、北海道とシベリアセンニュウの関わりについて書かせてもらおうと思います。

まず過去の記録から遡ってみることにします。戦前の日本鳥類目録（改訂第３版以前）では、シベリアセンニュウは日本産鳥類として記載されていました。ただ、その記録は、当時は日本の領土内であった朝鮮での記録があるのみでした（たとえば、日本鳥学会 1942）。その当時の考え方を示す記述によれば、シベリアセンニュウは朝鮮半島北部で春秋に多く通過するが、８月に採集された記録があることから、少数は繁殖するのかも知れない、ということでした（たとえば、山階 1980）。したがって領土が狭まった戦後は、当然のことながら、しばらく日本産鳥類としての記録はなくなりました。しかし、その間に、鳥類研究者の中村幸雄氏が1952年の夏に利尻・礼文島でシベリアセンニュウの声を聞き、しかも１個体を採集したという記録が出ています。ただ、残念ながらその標本の所在が不明（紛失？）とのことから、当時の日本鳥類目録改訂第４版には採用されませんでした（日本鳥学会 1958）。一方、私が若いころ（1970年～1980年代）、図鑑がそんなに多く出版されていなかった中で、ずいぶんお世話になったものに、保育社の原色日本鳥類図鑑（初版は1956年出版）がありました。有名な貿易商で鳥類研究者（標本収集家）でもある小林桂助氏の代表的な図鑑の一つですが、そこにはシベリアセンニュウの分布が「北海道（礼文島・利尻島）」としっかり明記してありました。この図鑑はいまでも新たに印刷を重ねているベストセラーですが、その記述はそのままになっていると思います。

その後の日本鳥類目録改訂第５版（日本鳥学会 1974）では、シベリアセンニュウについて確実な記録はないということで、今後の要検討種として扱われました。そうした中、当時九州でバンディングをしていた私は、1987年11月15日に鹿児島県国分市国分干拓地でシベリアセンニュウの成鳥１羽を捕獲、放鳥しました。その時点でこれは日本初記録の鳥ではないか、と思い、それまでに確実な記録がないか探しました。すると、その2年前、1985年９月29日に宗谷管内浜頓別町にある鳥類標識調査のための環境省１級ステーションで、協力調査員である山内昇氏によりシベリアセンニュウの成鳥１羽が、捕獲、放鳥された、という記録が出てきました。しかし、それは、毎年山階鳥類研究所が環境省に提出する標識調査の年度報告書にわずか２～３行で簡単に、捕獲した事実と「これは日本初記録である」と記述してあるだけで、写真はもとより、形態に関する記載もまったくありません。そこで、山内氏に手紙を出し、写真等があれば送ってもらうように要請しましたが、とうとう返事はありませんでした。だからといって、これを記録として落とすわけにはいかなかったので、私は自分の記録も含めて、日本でのシベリアセンニュウの記録として、山階鳥類研究所研究報告に報告しました（Kawaji & Abe 1988）。シベリアセンニュウには、その当時、それまで繁殖地域によって４つの亜種が記載されていました（Dement'evほか 1968）。いまは５つに分けられています

（図１、Kennerly & Pearson 2010など）。ちなみに、シマセンニュウとウチヤマセンニュウは、いまでこそそれぞれ独立種になっていますが、その少し前までは、シベリアセンニュウの亜種として記載されていたことがありました。シマセンニュウとシベリアセンニュウの分布域が重なる地域では、交雑種も報告されているほど、これら３種の関係は非常に近いようです。学術誌に報告する場合、なるべく亜種の同定までするのが望ましいのですが、浜頓別での個体は、北海道にもっとも近い地域で繁殖している亜種*minor*とされていました。しかし、その根拠は不明です。一方、私が捕獲した個体については、当時入手できた数少ない文献を読みあさって考察した結果、もっとも北に分布する亜種*rubescens*と思われたので、そう記載しました。おそらく、その個体は朝鮮半島を経由して九州に渡ってきたのではないかと推測されました。その記録（記載）が認

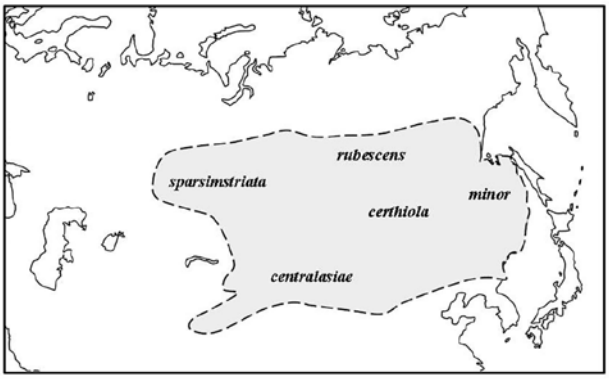

図１．シベリアセンニュウの繁殖地域と５亜種の分布域（Kennerly & Pearson 2010を参考に作図、亜種間の境界等ははっきりしない部分も多い）

められ、日本鳥類目録改訂第６版では、シベリアセンニュウが日本産鳥類として記載されました（日本鳥学会目録編集委員会 2000）。しかも、日本で記録される亜種は*rubescens*のみとなっています。それは直近の鳥類目録改訂第７版にも受け継がれています（日本鳥学会 2012）。北海道鳥類目録改訂４版にも、前述の浜頓別の記録しか書かれていないので（藤巻 2012）、今回の記録は北海道では2番目の記録になると思われます。ただ、前述のKawaji & Abe (1988)の中で私は、たまたま北海道北部と鹿児島県で記録されるくらいなので、目立たないだけで、全国各地で人知れず渡っている個体がまだまだいるのではないか、と指摘しました。案の定、その後は、日本海側の島々を中心に、舳倉島、見島、トカラ列島、沖縄島、与那国島などから、次々記録が挙がっているようです（日本鳥学会 2012）。

今回、札幌市のしかも南区の公園内で12月に記録されたことをどう考えるか、ですが、撮影者の吉野さんのお話によれば、真駒内公園内を流れる真駒内川の河川敷で盛んに採餌しながら歩いている個体を、橋の上から撮影したとのことです。また翌日（12月２日）も同じ場所で目撃したとのことです。写真には地面に雪が若干積もっている状況が写っており、渡り時期としてもかなり遅すぎる感があります。また、首の横や上胸部に黒っぽい縦斑が見られることから（写真２）、この個体はシベリアセンニュウの幼鳥（第１回冬羽）個体と思われます。おそらくその年生まれの個体が、渡りそびれてしまい、寒波の襲来に合わせて、慌てて南へ渡っていく途上だったものと思われます。

写真２．シベリアセンニュウ（性不明、第１回冬羽）前面
吉野一郎氏撮影

シベリアセンニュウの北海道での記録は、これまで真偽はともかく前述の利尻・礼文島での声、採集したという標本の話、浜頓別での捕獲記録のほか、1961年６月網走原生花園で、1965年６月に利尻島での観察記録もあるようです（黒田 1965）。今回の記録を考え合わせると、実際にはもっと多くの個体が通過している可能性があります。マキノセンニュウやシマセンニュウと非常に類似した特徴を有しますが、よく見ると、大きさ、上面、腰や上尾筒の色、形状等から識別は可能です。これまで撮りためた写真を多くお持ちの会員の皆さんも、疑わしいものを今一度見返してみると面白いものが発見できるかも知れません。

今回のシベリアセンニュウ写真を撮影された吉野一郎さんには、本稿を書くに当たり、写真の公開を快くご了承いただきました。また今雄二さんには写真を見せていただく労をとっていただきました。お二人に深く感謝申し上げます。

引用文献

Dement'ev et al. 1968. Birds of the Soviet Union VI. Israel Program for Scientific Translations.
藤巻裕蔵. 2012. 北海道鳥類目録 改訂４版. 極東鳥類研究会.
Kawaji, N. & Abe, J. 1988. Records of the Pallas's Grasshopper Warbler *Locustella certhiola* from Japan. J. Yamashina Inst. Ornith. 20: 107-110.
Kennerly, P. & Pearson, D. 2010. Reed and Bush Warblers. Christopher Helm.
小林桂助. 1976.原色日本鳥類図鑑. 保育社.
黒田長久.1965.北海道の鳥類調査. 山階鳥類研究所研究報告 4(3/4): 224-268
日本鳥学会. 1942.日本鳥類目録改訂第３版.
日本鳥学会. 1958.日本鳥類目録改訂第４版.

日本鳥学会. 1974.日本鳥類目録改訂第５版.
日本鳥学会. 2012.日本鳥類目録改訂第７版.
日本鳥学会目録編集委員会. 2000.日本鳥類目録改訂第６版.
山階鳥類研究所標識研究室.　1986.昭和60年度鳥類観測ステーション報告: 63.
山階芳麿. 1980. 日本の鳥類と其生態 第二巻（復刻版）. 出版科学総合研究所

厚岸湖・別寒辺牛川水系のオオハクチョウ

厚岸水鳥観察館　澁　谷　辰　生

北海道釧路管内厚岸町の厚岸湖・別寒辺牛川水系（図１）には、毎冬オオハクチョウが飛来し、その多くが越冬します（写真１）。でも、私が厚岸に来た1995年からのオ

写真１．越冬中のオオハクチョウ

オハクチョウのシーズン飛来数は、2008年度（2008年-2009年冬）を最後に、一つのピークの目安であった6,000羽を越えることがなくなりました。それ以降はピークの飛来数は減る一方です（図２）。越冬数も同様の経緯をたどっています（図３）。

2019年も例年並みの10月10日にオオハクチョウの初飛来を迎えました。10月末には1,000羽を越えましたが、11月に入ってからは約1,300羽で、これがこの冬の最大飛来数になってしまいました。では、オオハクチョウはどこに行ったのでしょう？

同じ道東太平洋側に位置する風蓮湖も同じで、秋の飛来数は激減しています。また、大きな渡りのルートである“道東ルート”の入り口となるオホーツクの湖沼群にはそれなりの数が入っていますが、入り口を過ぎると、十分な水草もあり環境的には何の問題もないように見える湖沼でも来なくなっていることがあります。

さて、北海道でとうもろこし栽培が盛んに行われるようになったのは、明治時代に入ってからです。北海道の開拓使が、それまでになかった新種であるスイートコーン（甘味種）、デントコーン（馬歯種）などの品種をアメリカから輸入し、北海道のとうもろこし栽培に導入しました。そ

図１．厚岸湖・別寒辺牛川水系位置図

の後、新品種は北海道から南下して本州にも広まり、日本での本格的なとうもろこし栽培が始まりました。

それから現代に至るまで作付けの増減を繰り返し、青刈りとうもろこし（飼料用）として2007年頃から再び増加。青刈りでないものが入っていないので、もっと増加していると思うのですが、資料がなかなか出てきません。しかし厚岸湖のオオハクチョウの減少時期は、おおよそデントコーン作付面積の再増加と符合しますし、自分の記憶ともおおよそ合致します。

つまり、道東のオオハクチョウについては、デントコーンへの餌場のシフトが始まっているのです。一般的には“農耕地シフト”といい、イギリスでは1960年代から起こっている出来事で、他のヨーロッパ諸国でも、ある時期から農地で採食する習性に変化しています。デントコーンは元々凄い肥料食いなので、スラリー系の糞尿を肥料として処分するには、デントコーンは一石二鳥の存在であるという背景があります。厚岸のように、元々作付けしてなかったエリアで急激に作付面積が増えたところもありますし、日高地方については、デントコーンの作付増加を積極的に行っていたけれども、周辺河川への負荷が大きすぎるため、現在は減らす方向にあるとのことです。

地域による差が大きいのですが、平均すると増加傾向です。本州での落ち穂拾いの対象にデントコーンがどれくらい含まれているのか？　それがいつ頃かなのかも気になる

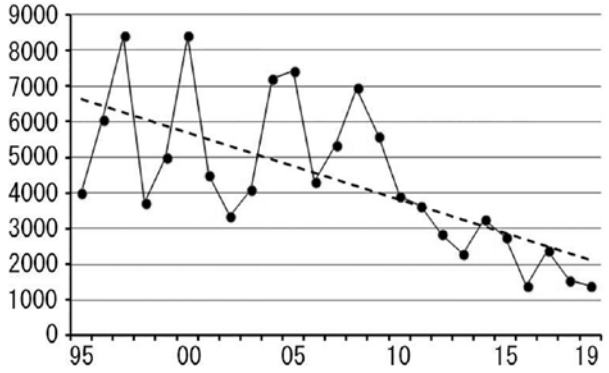

図２．厚岸湖における1995年～2019年のオオハクチョウの渡り最盛期の飛来数変化. 毎年の12月1日の羽数で示している．点線は回帰直線.

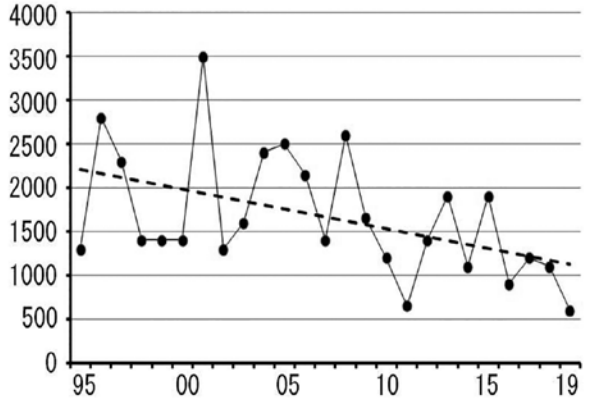

図３．厚岸湖における1995年～2019年のオオハクチョウの越冬数の変化　点線は回帰直線.

ところです。

実は、厚岸町でのデントコーンの作付けは爆発的に増えているのですが、オオハクチョウはそれほど入っておらず、むしろタンチョウの方が多いのです。ただ、その理由ははっきりしません。

今後注目すべきエリアは、

①紋別～斜里町までの海岸線内陸側圃場（北見市や美幌町などを含む）

②釧路湿原周辺圃場（釧路町、鶴居村、標茶町、旧阿寒町）

③十勝川下流エリア圃場（豊頃町、大樹町、浦幌町、幕別町、中札内村、更別村、広尾町）

で、おそらくまとまった調査はされていないと思いますし、かなり困難を極めると予想されます。もちろん上記エリアは、地面が凍結し、雪が降ってしまえば採食不能になるので越冬はできませんが、十勝川河口エリアでのオオハクチョウ、ガン類の異常な集中はほとんどデントコーンによるものです。長沼町周辺でもかなり集まっているようです。

デントコーンの作付面積の資料も、農業統計では他の作物に混ぜられていることもあり、私一人では数字を追いかけるのは非常に困難です。また、刈り取り直前の台風や、悪天候による実入りの悪さなどもあり“作付面積”＝“落ち穂の量”にはならないところも面倒な点です。

オオハクチョウについては、湖沼のアマモよりも圃場のデントコーンが流行の最先端といったところなのでしょう。そのまま越冬期に入っても、既に下ってしまった群れは厚岸湖に戻ってくることはなく、越冬数も減少傾向が強いのです。

その他のカモ科鳥類についても変化が見られます。スズガモの群れが消失しています。越冬期の厚岸湖には、ひとかたまり1,000羽の群れがいくつもあったのですが、ここ３シーズンほどは完全に消失しました。かわりにクイナ科のオオバンは激増しました。この２種については全国でも同じ傾向にあるとのことです。

オジロワシについてですが、繁殖する個体は、特にこの10～15年で激増しています。厚岸町内だけでも既に営巣数が２桁になっています。私が厚岸にやって来た時は３番（つが）いほどでしたが、今はどこを見てもオジロワシ。年中オジロワシ、といった有様です。

オオワシ（写真２）については、逆に越冬数は減少です。近年の暖冬傾向により、厚岸湖の氷が安定して凍ることがなくなり、かつては厚岸湖の氷上を覆い尽くしていた“氷下待ち網漁”が現在は４件以下になり、絶滅危惧漁となってしまっています。目当てにしていたおこぼれも激減し、300羽を超える群れは今は昔の話となっています。

このオオワシ、オジロワシについては、これだけで更に紙面を割くことになりますのでまたいつか書く機会があればと思っています。

気候変動と人間の生産活動により、野鳥に限らず様々な生き物が様々な変動を見せるようになってきています。日本一冷たい道東の海も海水温上昇がひどく、皆さんご存知のサケ、サンマの不漁に始まり、フノリも激減、コンブも品質が悪くなる一方です。人口減少と共に一次産業の町は今後どうなっていくのか、ただただ心配でしかありません。

写真２．弁天神社とオオワシ（矢印）

ノドグロツグミ（亜種ノドアカツグミ）の観察記録

北海道大学農学部生物資源科学科３年　千　葉　利　久

2020年１月から２月にかけて札幌市南区真駒内周辺においてノドグロツグミ（亜種ノドアカツグミ、以下ノドアカツグミ）を観察しましたので報告いたします。

１月５日の午前10時前、真駒内泉町の団地内で、ナナカマドの木にいる見慣れない大型ツグミを発見しました。撮影して画像を確認するとノドアカツグミとわかりましたが、すぐ通行人に驚いて10ｍほど離れた針葉樹（プンゲンストウヒ、以下トウヒ）に飛び込んでしまい、そのまま見失いました。その後居合わせた友人と周囲を探し回り、トウヒの中にいるところを発見して２時間ほど出てくるのを待ちましたが出て来ず、吹雪のためあきらめて帰宅しました。同日午後には同じ場所で友人２人が姿を確認しています。

その後この個体は少なくとも２週間以上同じ場所に留まりました。私が最後に姿を見たのは１月19日で、次に現地を訪れた26日には確認できなかったためこの間に移動したようです。滞在中、行動範囲は非常に狭く、ナナカマドで採餌し、隣にあるトウヒやエゾマツなどの針葉樹を隠れ場所として、それらの間で行き来を繰り返していました。ツグミ25羽ほどの群れがナナカマドに飛来した日もありましたが、その群れと共に移動することはなく単独で行動していました。またその鳴き声はツグミと非常に似ていました。1月末には餌となるナナカマドの実がなくなり、そのためこの場所を離れたようです。

亜種ノドアカツグミ　2020. 2. 21　札幌市南区真駒内

この個体と同一と思われるノドアカツグミが１月末から２月下旬まで、上述の団地からほど近い真駒内公園で観察され、札幌のみならず道外からも人が集まる人気ぶりとなっていました。こちらではナナカマドを中心として採餌しながらも比較的広い範囲を移動していました。また、ナナカマドを縄張りとするヒヨドリから攻撃され、追い回されている姿も観察されました。

ノドアカツグミは種ノドグロツグミの亜種で、中南部シベリアからモンゴル、中国東北部に繁殖分布し、インド東北部からミャンマー、中国南部で越冬する鳥であり、迷鳥として主に秋から春にかけて全国で記録されています。北海道での記録はこれまで森町（2003.1）、新十津川町（2005.3）、礼文島（2013.4）の３例がありますが、このほかに記録がないとすれば今回は４例目となり、非常に貴重な記録です。亜種ノドグロツグミについても報告例は非常に少なく、両亜種を含む種ノドグロツグミとしてもとても貴重な記録であると言えます。また、今回の個体は大雨覆の模様が一様である成鳥の特徴が見られること（写真上）などから成鳥、さらに喉から胸にかけての赤褐色の部分、いわゆる「よだれ掛け」がはっきりと確認されること（写真下）などから雄と考えられます。

今回のノドアカツグミはとてもきれいな個体で、見つけたときのうれしさも格別でした。また警戒心がそれほど強くなく、非常に近くで観察できました。一方、はじめに発見した場所は団地内で道も狭く、カメラを構えるのも憚られるような場所だったため、当初は仲間内でひっそりと観察していました。それでも滞在後半、偶然発見した方から情報が回り、週末多くのカメラが並んだ時は住人や通行人とのトラブルが起きないか心配でもありました。場所が公園に移ったおかげで杞憂に終わりましたが、あのまま移動しなかったらと思うと複雑な気持ちになります。珍しい鳥ですし、私も含め多くの人が見たいと思うのが普通ですからとても難しいところです。

初めて見たときは短期的な滞在を予想していましたが完全にそれが外れ、思わぬ長期滞在となりました。滞在の状況について情報をくれた友人たちの助けもあり、結果として１か月半以上に渡る連続的な記録を残すことができたことを非常にうれしく思います。そして、主役ノドアカツグミも無事繁殖地へ戻ってほしいところです。

前田森林公園（札幌市手稲区）でチョウセンメジロ

石狩市　本　多　　純

2019年９月29日にチョウセンメジロを撮影した顛末を報告させていただきます。

私は野鳥観察・撮影を趣味にしており、普段から車で数分の前田森林公園を散策しています。基本的に、迷鳥・珍鳥よりも身近にいる野鳥の観察を自身に課しているので、珍鳥の情報をいただいても遠出することはほとんどありません。時間があればこの公園で鳥を見ています。

この日は午前７時頃から小学４年生の次男にもカメラと三脚を持たせて、二人で小雨の降るなか撮影していました。メジロは頻繁に姿を見せてくれましたが、動きが速く次男には難しい様子でした。すると目の前のツリバナの枝に一羽のメジロが止まりました。「あそこの黄色いメジロが撮りやすいよ」とアドバイスしながら自分でも撮影したのがこのチョウセンメジロでした。撮影中も構図とピントの調整をしながら「何だか鮮やかなメジロだな」と思いながら数十枚撮った所で飛んで行きました。次男も横でしっかりと画像を残していました。この時普通のメジロよりも「黄色い」と思いながらも、それ以上考えることもなく撮影に没頭し、場所を変えながら正午頃まで続けました。

夕方、パソコンで画像を確認していると、嘴の色が肌色っぽいメジロが写っているのに気づきました。あの「黄色い」メジロです。他のメジロを見ると黒い嘴だったので変だなぁと思っていると、「このメジロ怪我しているの？」と横から妻が指摘しました。脇腹を見ると赤くなっており、最初はツリバナの実の色が付着したのかと思いましたが、別の角度の写真だと反対側の脇も同様の模様がありました。そこでメジロの亜種なのではないかと図鑑を調べてみました。結果、亜種ではなくメジロとは別種とされているチョウセンメジロだとわかりました。他にも写っているかもしれないと思い撮影画像を見ていくと、園内の異なる場所で３時間後にもう一回チョウセンメジロを撮影していました。

翌日、同じ公園で懇意にさせていただいている野鳥観察の先輩に報告しましたが、とても珍しい鳥ということを教えられ驚きました。翌日以降もまだいるかもしれないと思って探しましたが、見つけることはできませんでした。今までは見たことのない鳥だとその場で大抵気づくことができましたが、チョウセンメジロは他のメジロにまぎれて撮影時には気づけませんでした。しかし運良く写真に残すことができたので後の発見に繋がりました。

チョウセンメジロ　2019. 9. 29　札幌市手稲前田森林公園

今後もこれまでと同じ様に身近な鳥を見守って、時々ビックリする様な出会いを期待したいと思います。

【編集部付記】チョウセンメジロは朝鮮半島北部や中国北東部などで繁殖、ミャンマーやタイなどで越冬します。日本では希な旅鳥で、北海道では1999年に函館山と室蘭地球岬、2009年と2011年に北大苫小牧研究林での記録がありますが、すべて標識調査によるものです。今回の記録は自然状態での観察・写真撮影としては北海道ではおそらく初めてで、極めて貴重な報告です。なお、ピンク色（肌色）を帯びた嘴に加え、脇腹に栗色の（赤っぽい）斑がある（モノクロの掲載写真で黒っぽくみえる部分）のが大きな特徴で、メジロとは区別できます。

表紙の鳥　キレンジャク

札幌市内のあちこちでキレンジャクの群れが見られると当会の１月の定例役員会で聞いていたので、東区の我が家の方にもそのうち飛んでくるだろうと近くの伏古公園に通っていました。１月22日に公園内の大きなヤナギの木に300羽ほどの群れを見つけました。その時の写真です。50羽ほどの小群に分かれて、すぐ南側を通る環状通りの街路樹のナナカマドの実を食べに行ったり来たりしていました。群れ全体の中にはヒレンジャクが20羽くらい混じっていたようです。

栗林　宏三（札幌市東区）

創設50周年記念事業の取り組みと今後への期待

北海道野鳥愛護会50周年記念事業実行委員長　富　川　　徹

北海道野鳥愛護会は1970年（昭和45年）5月に創設され、今年で50年、まさしく半世紀を迎えます。時代とともに姿形で多少の変化がみられたかもしれませんが、会の柱でもある探鳥会をはじめ、講演会や会報発行などの実践活動においては、先人たちの思いは確実に引き継がれていると思います。

創立50周年ともなれば、これまでの記念イベントとは格別に違う感情に駆られます。それは役員幹事会でも早くから議題として挙げられ、50周年記念事業実行委員会を組織して話し合われているとおりです。そして、事業をやるからには盛大かつ充実性を追求したいと願うところですが、今の会財政の積立だけでは不十分でもあり、この度は思い切って関係の助成金獲得も視野に入れて計画することとし、50周年に相応しい内容で取り組む決意でいます。したがって、本事業は基本助成金を想定し進めていますが、得られなかった場合には「内容の縮小、または行わない」ということもご理解いただければ幸いです。以下に５つの事業内容とその成果および期待などの要点を記述します。

⑴　記念号「50周年記念号（野鳥だより200号）」の発行

会報200号を増ページし記念号として会の存在価値の理解を得ることを目標に、挨拶、祝辞、探鳥地変遷、思い出寄稿などでまとめます。

⑵　記念誌「私たちの探鳥会50年の記録」の発行

「17年の記録」および「30年の記録」（右図）に次ぐ50年版で、20地域以上の探鳥会の記録をデータ編として図表に整理し解説します。また、経年的な記録も掲載しデータ価値の高い資料を目指します。

⑶　探鳥記録のデータベース作成

記録のデータベース化を計画し、以下をつくります。

①探鳥会観察記録データベース構築ツール

②データベース集計解析ツール

③インターネットを介したデータベース利用ツール

⑷　記念式典および記念講演会等の開催

50周年を祝う記念式典および講演会・パネルディスカッションを、毎年1月の新年講演会と合わせて札幌市内のホテルで開催します。道内外から鳥類研究者や創設時の会員を招いて行います。

⑸　記念探鳥会

創立総会翌日の1970年5月10日に第1回探鳥会が野幌森林公園で行われました。その50年後となる同日の同場所で記念探鳥会を催し、50年前の探鳥会を彷彿とさせつつ気運を盛り上げます（下段参照）。また、特別企画として25周年記念に次ぐ国内外の探鳥ツアーを2021年4月に計画しています。

「50周年記念号」は半世紀の会活動を象徴するものであり、会の目的にも相応する記念誌です。また、「私たちの探鳥会50年の記録」は定性的な記録ではあるものの、長年にわたる一地域の経年記録としては、とりわけ道内では他に類を見ない貴重な資料として自負できるものです。さらに、データベース作成では、完成すれば会員のみならず野鳥関連団体や一般の愛鳥家の観察記録ツール（情報手段）としても利用できるものです。これら道内外に広く働きかけて利用の裾野拡大と連携を図ることで、野鳥生態についての広域で広汎なデータベース構築にもつながると期待できます。

このように、50周年記念事業の活動成果が、野鳥愛護活動を積極的に実践する魁（さきがけ）であった当会の存在価値を誰もが感じられるものであると同時に、引き続き野鳥保護をはじめとする生物多様性保全に貢献できることを願うものです。

★50周年記念探鳥会のお知らせ★

今号の「探鳥会あんない」５月10日の野幌森林公園探鳥会を50周年記念探鳥会とし、９時から10分程度、資料などをもとに、50年前の野幌原始林に思いを巡してみます。

1970年５月９日に設立総会が開かれ、翌10日（日）に第１回探鳥会が野幌森林公園で開催されました。50年後、同じ５月10日が日曜日というのも良い巡り合わせです。

この第１回探鳥会のことが載っている愛護会創立初期の野鳥だよりなどを見ると、当日は借り上げバスに乗り込んで多くの参加者が集まり、ウグイスやオオルリを楽しんだようです。野鳥だより第３号にある参加者報告文タイトルは「野幌原始林探鳥の記」です。今回も「原始林」を歩きましょう。

（担当幹事 早坂泰夫）

野幌森林公園

2019. 12. 1

【記録された鳥】トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、キレンジャク、ゴジュウカラ、キバシリ、ウソ　以上18種

【参加者】板谷輝美、今村三枝子、大表順子、大垣　創、鎌田要子、栗林宏三、小西芙美枝、小谷内久江、近藤章子、品川睦生、高田哲男・可南子・蒼翔・陽菜子、竹内強、田中みちよ、道場　優、畑　正輔、早坂泰夫、平岡信夫、藤田　潔、藤吉　功、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、森谷好雄、山本育子、横山加奈子、吉田慶子

以上30名

【担当幹事】道場　優、早坂泰夫

小　樽　港

2020. 1. 19

札幌市白石区　伊藤　知佳子

私は自然や動物が好きで、昨年まで住んでいた網走でのお気に入りの場所は、「濤沸湖水鳥湿地センター」でした。センターに行くとさまざまな鳥たちと出会うことが出来ました。鳥の特徴をわかりやすく教えてくださる職員の方もいらっしゃいます。転勤で札幌に住むと自分で鳥を見つけることが出来ません。一方、友人のフェイスブックを見ると綺麗な鳥の写真をたくさん見ることが出来ました。札幌でもこんなに素晴らしい景色に出会えるなんて羨ましいと思い、彼の所属している「北海道野鳥愛護会」を紹介して頂きました。１月は小樽港と知り、きっとカモメやカモ、アイサに会えるかなとワクワクしました。

１月探鳥会は札幌駅に８時集合、バスに乗り出発早々、バスの中からは既に鳥を見つけたという声が聞こえてきます。みなさん、さすがに鳥に詳しく鳥の名前が飛び交います。私は本を片手に鳥の特徴を確認します。日和山灯台に到着するとオジロワシが歓迎してくれました。お天気にも恵まれ鳥を探すには心地よい澄んだ空気でした。しかし後から知りましたが、あまり海が凪だと湾の周辺で鳥を見ることが難しいとのことでした。それでもベテランのみなさんが見つけてくださった鳥をスコープで見せてもらうと楽しく時間を忘れるくらいでした。

今年は雪が少ない北海道ですが、この弊害が生じることがないことを願います。いつまでも動物たちと共生できる環境を維持、守っていきたいです。

小樽港探鳥会風景（日和山灯台）

小樽港のウミアイサ（左３羽）とカンムリカイツブリ（右）
参加者撮影

【記録された鳥】マガモ、カルガモ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、オオハム、シロエリオオハム、ヒメウ、ウミウ、ウミネコ、カモメ、ワシカモメ、シロカモメ、オオセグロカモメ、ウミガラス、トビ、オジロワシ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、ツグミ、スズメ、ハクセキレイ、シメ、カワラバト（ドバト）　以上30種

【参加者】板谷輝美、伊藤知佳子、臼田　正、梅木賢俊、大表順子、太田由美子、岡部良雄・三冬、北山政人、國本昌秀、栗林宏三、小谷内久江、近藤章子、近藤直人、品川睦生、島崎康広、鈴木幸弥、髙橋宣子、高畠千尋、竹内正、田中さちよ、田守真一・敦子、辻　雅司、中田勝義、永野一彦・朋美、成田京子、畑　正輔、早坂泰夫、原　美保、樋口孝城、平岡信夫、藤田　潔、堀田代久・みゆき、村田恵一、本杉政司・朋子、横山加奈子、吉田慶子

以上41名

【担当幹事】梅木賢俊、栗林宏三、畑　正輔

野　幌　森　林　公　園

2020. 2. 2

【記録された鳥】トビ、オジロワシ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナ

ガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、ウソ、シメ、イカル　以上19種

【参加者】石塚　肇・れい子、石橋紀彦、板谷輝美、今村三枝子、江蔵俊一、大表順子、大垣　創、菊池志津子、栗林宏三、児玉由美子、小西芙美枝、小谷内久江、近藤章子、品川睦生、高田可南子・蒼翔、髙浪一史、高橋貞夫、高畠千尋、田守真一、富川　徹、西田洋一、畑　正輔、早坂泰夫、藤田　潔、藤吉　功、辺見敦子、松原寛直・敏子、三輪節子、本杉政司・朋子、山本育子、横山加奈子、吉田慶子　以上36名

【担当幹事】富川　徹、松原寛直

★宿泊探鳥会（旭岳）のお知らせ★

2020年度の宿泊探鳥会は旭岳姿見駅周辺と旭岳温泉周辺です。姿見駅周辺ではギンザンマシコ、カヤクグリ、ノゴマ、ホシガラスなどを探鳥します。旭岳温泉周辺ではコマドリ、ビンズイ、ベニマシコなどが期待されます。

１日目はロープウェイ姿見駅周辺で、２日目は希望により　①姿見駅周辺（ロープウェイ代金 3,200円は別途各自負担、当日受付）と、②温泉周辺の２班に分かれての探鳥の予定です。以下の要領で行います。

月　　日　７月11日(土)～12日(日)
集合場所　札幌駅　北口「鐘の広場」
集合時刻　11日　７：15
行程内容
１日目　札幌駅北口（7：30発）→（昼食）→ 旭岳姿見駅周辺で探鳥 → 大雪山白樺荘（泊）
２日目　①旭岳姿見駅周辺または②旭岳温泉周辺で探鳥　→（昼食）→札幌駅北口17：00頃
（道路状況等によります）

定　　員　45名（最少催行人員35名）
35名に満たない場合は旅行を中止することがあります。その場合には６月18日までにお知らせし、支払いいただいた旅行代金を返金致します。催行中止の連絡がない場合は催行確定です。６月26日頃に発送するご案内をお待ち下さい。

参加費用　25,000円
貸切バス代等交通費、宿泊代、１日目の旭岳ロープウェイ料金、食事代（１日目昼食から２日目の昼食まで）

宿　　泊　大雪山白樺荘

申 込 先　佐々木　裕　（宿泊探鳥会担当幹事）
電話　011－303－2660
※４月１日(水) 9：00から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。
※４月１日の午前中は電話が混み合い、お待ちいただくことがあります。話し中でも、ツーツーツーというお話し中の音は発せられませんが、受付しておりますので、かけ直しください。
※Eメールでも受け付けをいたします。
メールアドレス : sasaki-sr@hbcv.jp
連絡先電話番号と７月11日現在の年齢（旅行傷害保険用）をご連絡ください。

旅行代金　申込み後　10日以内に旅行代金を下記口座にお振込みください。
北洋銀行札幌駅南口支店
口座名：（株)エイチ・ビー・シー・ビジョン
口座番号：普通預金口座 3790202

旭岳ギンザンマシコ（野鳥だより197号表紙）

取消規定　ご都合により参加のお取消しをされる場合は下記の取消料をいただきます。
６月19日(金)～７月３日(金)
　旅行代金の20%
７月４日(土)～７月７日(火)
　旅行代金の30%
７月８日(水)～７月10日(金)
　旅行代金の50%、
ご出発当日
　旅行代金全額（払戻金はありません）

取扱旅行社
(株)エイチ･ビー･シー･ビジョン　HBCトラベル
電話011－221－8899（土、日、祝は休業）

※予約・取り消しなどは、直接、佐々木幹事（電話011－303－2660）に連絡下さい。
※天候や道路状況、その他やむを得ない事情により旅程が変更される場合がありますことをご了承願います。

★茨戸川緑地探鳥会のお知らせ★

日　時：2020年６月６日(土)　9：00～11：30
集　合：茨戸川緑地管理事務所前（右図参照）
　　札幌市北区篠路町拓北298（駐車場隣接）
交　通：公共交通機関（JR、中央バス）利用は、徒歩距離等も含めてかなり不便です。
　　自家用車またはJRあいの里教育大からタクシー利用（約３km）になります。

茨戸川と石狩川に囲まれた茨戸川緑地は、ノビタキやオオジュリン、ベニマシコ、コヨシキリ、オオヨシキリなどの草原の鳥を見ることができます。カッコウの声も聞かれ、時にはアリスイなどが姿を現すこともあります。今年は、初夏の季節に、お試し探鳥会として実施してみることしました。

11：30頃鳥合せを行い自由解散とします。管理事務所には休憩所、トイレ、自動販売機などが完備されていますので、ゆっくり昼食をとることもできます。

鳥民だより

◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ

会　　場：札幌エルプラザ １階　情報センター
　　（札幌市北区北8条西3丁目）
　　JR札幌駅地下直結又は北口出口の北向い
期　　間：2020年５月19日(火)～５月30日(土)
展示時間：9：00～20：00
　　（ただし初日は15：00から、最終日は16：00まで）
応募要領：写真は、最近３年以内に原則として北海道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はＡ４版。鳥の名前・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付してください。原則としてお一人２枚以内とします。３枚以上の場合は展示優先順位を明記してください。
募集締切：４月30日(木)までに、下記の愛護会事務所に送付または持参してください（必着）。
　〒060-0003　札幌市中央区北３条西11丁目　加森ビル５六階　自然保護協会気付　北海道野鳥愛護会　宛て
お願い事項
　写真展に出展された作品を、愛護会ホームページに掲載いたしますので、お手数ですが、JPEGデーターを下記までMail添付にてお送り願います。
　総務　辻幹事　E-Mail：　mtsuji@eagle.ocn.ne.jp
準備・展示作業
　５月19日(火)10：00から事務所にて額付・キャプションを作成し、引き続き13：00から会場にて展示作業を行います。お手すきの方はご協力をお願いします。
　＊なお、引き続き野幌自然ふれあい交流館で６月に１ヶ月間の展示を計画しております。

【お問い合わせ】畑　正輔　（011－894－0017）

◆総会のご案内

日　時：2020年４月15日(水)　18：00～
場　所：かでる２・７　110会議室（１階）
　　（札幌市中央区北２条西７丁目）
　　※総会終了後に懇親会を予定しています。
【お問い合わせ】　畑　正輔　（011－894－0017）

◆大盛会の新年講演会

2019年度新年講演会は2020年１月11日に「かでる2・7」で開催され、先崎啓究・愛子ご夫妻の講演がありました。当日の参加者は過去最多の127名で、会員外の参加者も多く、大盛会でした。皆様、講演を十分に楽しまれたようでした。

新年講演会風景

【新しく会員になられた方々】

小亀　安代（江別市）　　真鍋　京子（札幌市西区）
伊藤　聖子（江別市）　　板谷　輝美（札幌市白石区）
成田　京子（札幌市北区）　伊藤知佳子（札幌市白石区）
児玉由美子（札幌市東区）　菊池志津子（札幌市白石区）
高畠　千尋（札幌市北区）
石塚　肇・鈴子（札幌市厚別区）

☆ 探鳥会（宿泊探鳥会を除く）は、どなたでも参加できます。参加費無料。事前申し込み不要です。直接現地に集合してください。昼食、双眼鏡等観察用具、筆記具などをご持参ください。
☆ 集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。
☆ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。
☆ 探鳥会の開催を変更・中止する場合もありますので、愛護会のホームページでお確かめください。
☆ 交通機関の運行時刻等については、最寄りの営業所等にお問い合わせください。
☆ 探鳥会の問い合わせ先
北海道自然保護協会　☎011－251－5465　10：00～16：00（土・日曜、祝祭日を除く）

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月12日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前　9：30
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発（北札苗線東69番・東79番）「モエレ公園東口」下車、徒歩15分 開氷後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月19日(日)	宮島沼	湖畔　10：00
	中央バス：岩見沢ターミナル発（月形行）又は月形駅発(岩見沢行）「大富」下車、徒歩10分 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月26日(日)	野幌森林公園	大沢口　9：00
	JRバス：新札幌駅発（文京台循環線）「文京台南町」下車、又は夕鉄バス：新札幌駅発（文京台南町行）「大沢公園入口」下車、徒歩各５分。夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月5日(祝)	藤の沢	白鳥園（エルクの森パークゴルフ場向い）　9：00
	定鉄バス：札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発（定山渓温泉行又は豊滝行）「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分 藤の沢小鳥の村とその周辺をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月10日(日)	野幌森林公園	大沢口　9：00
	４月26日の案内を参照してください。 木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月17日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場　8：00
	公共交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミが出現することもあります。	
5月24日(日)	鵡川河口	むかわ温泉四季の館駐車場　9：45
	道南バス：札幌駅前又は大谷地バスターミナル発（浦河行/ペガサス号）「四季の館前」下車 鵡川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
5月31日(日)	野幌森林公園	大沢口　6：00
	早朝のため公共交通機関はありません。 早朝探鳥会です。夏鳥の囀りを聞きながら早朝の森を歩きます。春の草花も真っ盛りです。	
6月7日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前　9：10
	JR千歳線「植苗」下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月14日(日)	厚別川	川下公園駐車場　9：00
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発（川下線白24番）「川下公園」下車 厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月21日(日)	野幌森林公園	大沢口　9：00
	４月26日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月28日(日)	福移	福移小中学校前　9：00
	中央バス：地下鉄環状通東駅発（北札苗線）「福移小学校通」下車、徒歩５分 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しみます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費　個人 2,000 円、家族 3,000 円（会計年度４月より）　郵便振替 02710－5－18287
〒060－0003 札幌市中央区北３条西11丁目加森ビル５・六階 北海道自然保護協会気付 ☎（011）251－5465
HPのアドレス　https://aigokai.org